

# 前へ

最終話

當真嗣朗

「前へ！」 最終話

當眞嗣朗

隣のベッドには、とても元気な若い女の子がいました。周囲をカーテンで囲ってあるので、直接その姿を窺い知ることには出来ません。しかしその声の調子や、看護婦さんとのやり取りの内容から、十代後半から二十代前半だろうと察しがつきました。ベッドの周囲にはつねに若々しさに溢れたエネルギーが満ちていて、それは処置室の静かな雰囲気明るく賑やかなものへと変えていました。彼女はとても快活な声で笑い、くだらないジョークの類いをしきりに口にして場を盛り上げていました。わたしはなんとなくですが、羨ましいな、と感じました。彼女のその無邪気さが、わたしの心を魅了していました。それはすでに、わたしが喪失して久しい種類のものでした。それをふたたび取り戻すことは困難ですが、それに見とれているだけで、自分が一気に若返っていくような、心地よい気持ちになりました。

その後しばらくして、彼女はベッドごと、どこかに運ばれていきました。彼女がどういう理由で医療施設の処置室にいたのか？ 彼女が運ばれていったのが、どこなのか？ わた

しには一切判らないままでした。看護婦に訊いてみようかと思いましたが、他人のプライバシーを詮索するのは好ましくないと考えて、それは止めました。太陽のように明るい彼女が去ってしまうと、処置室は深い静けさに包まれました。まるでこの世界から明かりという明かりが消えてしまったようでした。隣のベッドとわたしのベッドを阻むカーテンは取り払われ、そこには空虚な空間が広がっていました。わたしは自分が一生、誰にも理解されずに死んでいくのだ、という気持ちになりました。それからわたしは静かに目を閉じて、眠りに潜り込んでいきました。

それからどれだけの時間が経過したのか？ それは判然としません。慌ただしい音がして目を覚ますと、わたしのベッドの隣のスペースに、一台の寝台が運ばれてきました。そのベッドには、頭に何重にも包帯を巻いた女性が横たわっていました。身体にはいたる所にチューブが差し込まれていて、多くの機械が彼女を取り囲んでいました。大勢の看護婦たちが、そのケアに忙しく動いていました。わたしは本能的に悟りました。このすでに意識を喪失した女性は、さきほどの元気に満ち溢れた若い女の子なのだ、と。

わたしは胸に動悸を感じて、身体を火照らせました。脇の下にじつとりと汗が滲み、呼吸のリズムが乱れていきました。寝台の上に横たわった彼女は、ぴくりとも身体を動かさませんでした。ただひたすら荒い呼吸を続けており、意識は完全に喪失した状態でした。看護婦たちは彼女の点滴の具合を確かめ、装着された機器で彼女の身体の状態を確認して、傍らのノート・パソコンに入力していました。わたしは看護婦たちに、こう問い質したい気持ちでいっぱいでした。

彼女になにが起きたのですか？

ほとんどパニックに近い精神状態の中で、わたしは、彼女の様子を見つめていました。ほんの数時間前まで、彼女は誰もが羨むほどの快活さを示していたのです。周囲に他愛のない冗談を言って場を和ませ、自分の未来についてさえ、明るい調子で語っていたのです。その様子を傍で窺いながら、わたしは彼女に憧れていたのです。彼女の若さに、そしてその前途に広がる輝かしい未来というものに！ しかし今、彼女は激しい困難の渦中にありました。その身体は微動だにせず、その意識は深い泥に埋もれ、それをサルベージする努力は、今のところ良い結果を生み出してはいないようでした。わたし

しは両方の目に、涙が溢れてくるのを感じました。それはどんなに堪えようとしても無駄でした。まるでわたしという存在が涙を流す機械と化したかのように、それは止めどなく流れ落ちていきました。わたしは心の中で神に祈りました。どうか、この清く若き少女をお救いください、と。それから何度もくりかえし、彼女に一体なにが起きたのだ、と思いましたが。

わたしは、それをこそ最も知りたい気持ちでした。あの明るく魅力に溢れた若い命が、どのような経緯をたどって、運命という場所に辿りついたのか？ それをこそ、知りたくてたまりませんでした。しかし、わたしと彼女との間には、けっして乗り越えることの出来ない高く頑丈な壁がありました。わたしには、どうしてもそれを乗り越えることも、突き崩すことも出来ませんでした。わたしは今、それをこそやらなければならないというのにです。

その後、彼女のベッドはふたたび、どこかへと運ばれていきました。けっきょく、意識が回復することはありませんでした。わたしは近くにいた看護婦を呼び止めて、訊いてみました。彼女の身に一体、なにが起きたのだ、と。しかし看護

婦は、個人情報保護を理由に、その問いには答えてくれませんでした。

それから一時間後、すべての処置を終えたわたしは、その医療施設を去りました。その帰り道です。寂しい気持ちで立ち寄った書店の棚に、あなたの本を見つけました。そしてなんとなく手に取り、ページをぱらぱらと捲って、そのままレジに持っていききました。あなたの本は今、わたしの寝室にあります。そして、わたしを魅了しました。

これが、わたしのあなたの出版した本に対する感想のすべてです。正直に言って、あなたの本は、わたしを激しく打ちました。回復困難なほどに、わたしを破壊したのです。あなたの今後の活躍を、心から期待しております。では」

Aはその感想の手紙を二度、三度と、くりかえして目を通した。ファックス用紙に印字されたその手書きの文字は、書き手の深い知性を感じさせるほどに、ていねいに筆記されていた。文章を連ねる言葉の一つひとつが、読み手の目の前で鮮明なイメージを作り出し、独自のヴィジョンを打ち出しているように思えた。何度も読み返し、そのすべてを頭の中の

正確な場所に留めた後、Aはその便箋から顔を上げ、おおきく息を吐いた。神経を集中させてその文面に意識を潜り込ませていた間、Aの身体は、まるですべての神経を麻痺させられたかのように、まったく動かなくなっていた。両手が石のように固くなり、手紙そのものが高度な質量を持ちはじめ、その重量を増したかのような感覚があった。胸の内に、熱く強い感情の塊が突き上げてくるのを感じた。それは勢いをつけた状態で、今にも身体を突き破って、外側に飛び出していくように感じられた。

Aは、心の底から思った。快哉を叫びたいほどだった。これこそが、ぼくが求めていたものなのだ！  
この強力な熱に溢れたこの感情こそが、ぼくが長年欲しがっていたものなのだ！

そこには誰かとつねに繋がりにあるという、強く確かな感触があった。そして、深いレベルで受け入れられているという重たい確信があった。Aが小説という形で表現したかったそのすべてのものを、この見ず知らずの女性は、ほとんどそのままの形で受け取り、自分というフィルターを通して後で、深く理解してくれたのだ。そこには新鮮な驚きと感動

があった。じゆうぶん過ぎるほどの手応えが、そこには存在していたのだ。

ぼくは、間違っていないかったのだ！

ようやく動くようになった身体で、Aは慌てて、机の上に放り出してあった携帯電話を取り上げた。そしてパネル操作をして、電話帳を開き、よく見知っている名前の人物に電話をかけた。それはすぐには繋がらなかった。まるで互いの間に築き上げた高い壁が、それぞれに互いを退け合っているように、意思の疎通を拒んでいるようだった。それでもAは、執拗に相手呼び出し続けた。それは何度か、留守番電話サービスに繋がりが、Aはその度にかけ直した。やがて、根負けしたように、相手が出た。

Aは、受話口の向こうにいるはずの男に、一気呵成に言った。

「ごめん。ぼくだ。ぼくたちは、やり直すべきだ。これまで二人で歩んできた道を振り返りながら、また、先へ先へと進んでいくべきなんだ。確かに、ぼくとキミとの間には、多くの壁があった。それはぼくたちが必死の努力をしても、けっ

して超えることの出来なかった壁だった。ぼくたちは長い間、その壁の手前で互いに絶望していた。でもね、ぼくは今、判ったんだよ。前へ進もう。後ろを振り返り振り返り、それでも前へ進もう。希望のある方向へ。たくさんの知恵を使って。これからもぼくとキミとの間には、いろんなことがあると思う。いくつもの壁が、立ちほだかるだろう。それは絶望的なほどに高い壁かもしれない。でもね、ぼくは思うんだ。ぼくたちはきっと、分かり合えるはずだって。ぼくはつねにキミの傍にいる。キミだって同じはずだ。ぼくとキミは繋がっている。とても深いレベルで確かに繋がりがあっていて。恐れることはないよ。前へ進もう。ぼくたちには未来がある。きつと明るい未来が待っているはずだ。だから、前へ進もう。そうだよ、ぼくだよ。キミの大切な恋人だ。そしてキミは、ぼくの愛する恋人なんだ。ぼくはもう恐れない。誤解を恐れずに。ぼくとキミとの間には、強い絆がある。さあ、恐れずに進もう。前へ！」

おわり